

# 日本民俗学における「地域差」と「地域性」概念について

山本 質素

はじめに

- 一 日本民俗学における「地域」概念の変遷
- 二 民俗および地域社会研究における民俗誌の役割

## 論文要旨

本稿の前半部分(第一章)では、「地域」や「地域性」という用語が日本民俗学の方法の中でどのように用いられてきたかを概観する。具体的には、「民俗は地方的な差異をもって表れる」という現象と、それに関連して「民俗が存在している地域」とを、民俗学研究者はどのように捉えてきたかというところを、初期の頃からの論考や論争を題材にして検討することになる。対象としたおもな時代は、昭和十年代から四十年代前半である。

この検討によって、「民俗事象の地方的な差異」という現象に対したときの二つの認識・方法が、未分化のままに研究が進められてきた経過が明らかになる。すなわち、一つは地域を単なる地点・場所として捉え、「民俗の地方差、地域差は時代差を表す」とする認識・方法であり、他の一つは民俗を存在させている「地域社会」との関連で「地域性」を捉えようとする認識・方法である。日本民俗学が形成され、展開する初期においては、前者が採用され、後者が退けられる傾向が強かったと総括することができる。それ故に、後者の「地域性」を追究する立場を確立するためには、「民俗の地域差」と「地域性」とを

明確に区別する作業が必要であった。そのための努力は昭和四十年代まで重ねられ、ようやく二つの認識・方法の違いが明確に区別されるようになる。

本稿の後半部分(第二章)では、「民俗」と「地域社会」をともに視野に入れた研究の中で「民俗誌」の有効性を検討する。

第一節では、日本民俗学が地域社会(「村」「郷土」)をどのように認識し、捉えようとしてきたのかを概観する。これは本稿の前半部分で捉えることができた、民俗学の中で「地域」概念の展開をより明確にする作業でもある。この検討によって「地域」は、民俗を担う人々から成る「地域社会」として、研究の対象となる必要性が明らかになる。

第二節では、「民俗」と「地域社会」を視野に入れた研究の中で「民俗誌」がどのような役割を果たすのか、その枠組みと有効性についての筆者の考え方を述べ、最後の第三節では、その民俗誌の方法を具体的に適用した近郊農村での事例を付け加える。